地域福祉活動職員の
福岡
まなこ
社協活動前進のために
No.43　1998年2月発行　福岡県地域福祉活動職員連絡会　まなこ編集委員会　印刷　コロニー印刷

～社協に期待すること～

社会保障の構造が変わろうとしているいま、わたしたち地域福祉活動を中心になって行う社協職員は何をなすべきでしょうか。
その方向性を探るべく、今回は長い間にわたって直方市社協福祉活動専門員として活躍された、高石伸人氏に社協への期待をお寄せ頂きました。

「社協に期待すること」

九州龍谷短期大学
助教授　高石　伸人　氏

与えられたテーマには既に前提がある。筆者は社協への期待を捨てていない、期待して欲しい、期待してもらわなければ自分達の浮かぶ瀬がない、などの。従って、ご要望にそって、期待していないという結論にならないように話を進めてみようと思う。

I

「社協に期待すること」を述べるに当たって、「誰が」あるいは「誰から」という、期待の主体をどこに求めるかで自ずと中味は違うだろう。考えようによっては、その未だ不確定なスペースがあるところが社協の社協たる所以というのか、残された可能性の余地でもあろうか。

前号では、牧里毎治氏が社協生き残り論を、公的介護保険導入という政策動向とのからみで指摘されているところだが、政策主体から求められている社協の方向性については、既に諸氏がうすうすであれ、日ごろ肌身にお感じのことと察せられる。実は、その「うすうす」さの感覚こそが、社協（職員）の軟弱さであり、付け入れられ易さであることも、少しは自責する必要があるのかも知れない。

これまでも、例えば社協法制化の時点で、また「基本要項」の改訂が提起された折りに、私達はそのことの含む問題を、どれ程真摯に自らへの問いとして引き受けただろうか。そうした怠慢と、既成事実の積み重ねたことが今は、ツケとして回されているのではないのか。とすれば、この際に、まずこの問に政策主体の側が企図してきた「社協かくあるべき論」を検討しておかなければなるまい。

II

社会福祉政策の中で、施設福祉から地域福祉、在宅福祉への重心移動が強調されるようになる動きは、一九七九年の大平内閣の「新経済社会七ケ年計画」の中で、「個人の自助努力と家庭や近隣、地域社会等の連帯を基礎としつつ、効率のよい適正な公的福祉を重点的に保障する」という、いわゆる「日本型福祉社会構想」が発表されたあたりから加速してくる。一九八一年の「第二次臨時行政調査会」の答申では「活力ある福祉社会」という言葉が使われ、福祉問題対策への公的責任、負担の極小化や自助努力の強調、民間活力の利用や「上乗せ福祉」の見直しといった内容が盛り込まれた。その年「生活保護適正実施」という名目での「一二三号通知」が全国の市町村に出されて、「劣等処遇」の再強化が図られることになる。

翌年、医療費無料制の廃止につながる「老人保健法」が公布され、さらに翌八三年、中曽根内閣は「一九八〇年代経済社会の展望と指針」という閣議決定によって、「在宅福祉を基本とした地域福祉の基礎づくり」をうたい、行財政改革の推進に踏み出した。奇しくも、その年に市町村社協が法制化されるのである。

さらに、一九八五年に福祉関連の補助金の一割カット実施。翌年には老人保健施設の制度化を目玉とした「老人保健法」の改定。そして一九八七年の「社会福祉士及び介護福祉士法」制定によって医療費抑制をねらいとした在宅福祉推進のためのマンパワーの確保に大きく道が拓かれていく。

一九八九年には、福祉関係三審議会合同企画分科会が「今後の社会福祉のあり方について」を発表し、①サービスの多様化、②供給主体の多様化、③措置制度の見直し（福祉の市場化）を提起する。同じ年「高齢者保健福祉推

進十カ年戦略（ゴールドプラン）」が打ち出され、そのための財源確保を理由に消費税が導入される。福祉サービスの産業化路線が敷かれて、まさにその動向に見合う形で「新社会福祉協議会基本要項（第一次案）」を全社協が公表して、「見える社協」への事業体化に力点が置かれることになる。（※注1）

近年の動向を指摘してみることで、政策主体が期待する社協像がほの見えてくると思われるが、どうだろうか。地域福祉をめぐる昨今の論議の焦点が「効率のよいサービス供給体制の整備」という方向へ導かれていくのに符合して、社協もまた、民間の「地域福祉推進の中核的存在」として、それに相応しい衣裳を身にまとうことが期待されてきたとも言える。

III

「〝住民主体〟の社協」という言葉には、問題当事者の側に立って実践してきた、多くの先人達の心意気といったものを感じ取ることができる。「住民は福祉社会形成の主体たりうるか」という問いは、ほとんど永久革命のテーマにも似て、私達の不変の課題とも言えるだろう。ぼく自身も、これまでいくつかの機会に「住民主体」論について述べてきたところだが、社協という組織の現実を見る時、その役員の主体認識を例に取るだけで、どれ程のものかは判然としてくる。今後、事業体化が進み、いくつもの顔を合わせ持つことになっていけば、経営戦略のノウハウを熟知した企業マンの登用という話も出てきたりして、いよいよ「住民主体」の問いは風前の灯火となるのではないだろうか。

これまでの社協が足枷としても主体の担い手としてきた問題当事者や、ボランティア、プラス地域社協の活動家達は、社協に何を期待しているのか。前号のアンケートによれば、「市民の声を聞きそれを支える所。たくさんの市民が参加して、まちづくりをしていく所。切捨てをしない所。」、「地域に根ざした活動拠点」、「常に当事者の立場に立って、親身になって相談にのってくれ、常に解決の糸口を探ろうと努力してくれる所」、「地域福祉の向上を目指すために行政に対して強力な発言力をもつべき」で、「行政と批判的に協力し合い、福祉の問題意識を持たせる（所）」「市民が今何を求めているかを把握し、解決の方策を講じていってもらいたい」などの声が寄せられている。

調査対象が限られている点を差し引いても、苦言を含めて、まだその可能性に期待を持っていただいているという実感を抱く。いくらか整理してみると、①福祉の地域づくりをすすめるネットワークの拠点、②基本スタンスにおいて、常に「少数者」の側に立って活動を推進する組織、③住民の声（ニーズ）を把握し、解決活動を組織する団体、④身近な窓口、⑤自治の形成を目指し、行政と批判的協働体制を堅持する民間組織であって欲しい、と望まれている。

従来から言われてきた地域組織化や福祉組織化を中核機能とした、プラス小回りのきく、民間活動の拠点というところに、その役割期待が集中しているように思われる。サービス競争の市場に参入して、新しい顧客を求めて生き残れるかどうかに身を削るよりも、たとえ少数であっても、願いを持った住民の声に足場を置き続けるというのが、歴史を刻む者としての選ぶべき道ではなかろうか。

即座に、そうは言っても予算が削られてはどうなるのかといった反論が返ってきそうである。とりあえず、それにはその通りだと答えるしかない。問われているのは、路線の「正―誤」ではなく、私たちがどのような歩みを、どのような社会を選ぼうとするかなのだ。ぼく流に言えば、負けいくさの戦いようなのだ。

IV

つまるところ、「社協に何を期待していますか」と尋ねる〈あなた〉は、その応答に沿う覚悟を持った上で、問うているのかこそが質されなければなるまい。期待が〈あなた〉の意に沿わぬことであった場合には、あるいは、結果として生活を脅かす懸念を含んでいると感じられる選択を突き付けられたとしても、背負う自己に立って投げられた問いであるのか。もし、何がしかの後ろめたさを埋め合わせるためであるならば、およそこの種のアンケートは、そしてぼくの期待も意味をなさない。

社会福祉の制度や実践が、憲法二五条の「生存権」規定に依拠したものであることには、誰も異論がないだろう。その「生存権」の基礎にある「生命の維持」がいま、「生（死）の二分化」という危機的状況に置かれている。生まれること、老いること、病むこと、そして死にゆくことの自然のいとなみが、先端医療技術を露払いにして、国家（政・財・官）の手のうちに操作される（＝生命操作）時代をぼくたちは招き寄せてしまった。

「ほんのひと昔前には、人間のからだから得られた生体物質はほとんど価値のないものであった。それが今や、先進するバイオテクノロジー旋風によって人体の一大マーケットが形成されてしまった。臓器移植や胎児組織の移植、生殖技術や遺伝子操作が人間の部品を、たとえそれが微細な組織片であっても、非常に高価なものにしたのである。人間の部品の売買は急速に全世界規模の産業になりつつある。」（※注2）

誰かを生き延びさせるために、他のだれかを殺す―そんな法律がこの国でも承認された。「臓器移植法」という恐怖に満ちた用語が暗示しているとおり、人間を最後の資源と考え、臓器を人体部品として扱うことになったのだ

から、そのために「脳死」という死の定義が導かれたのだから、脳が機能していないと判断されたら（誰に!?）、ぼくもそして〈あなた〉も部品の集合体に過ぎないのだ。そのような人間資源論が人々の意識の座に腰をおろすことになれば、そのまなざしは、「無能（脳）な人間は、せめて死んで（部品として）有能な人の（構成する社会）のお役に立つべきである」と語るだろう。その向けられる目線の先には、知的障害者や痴呆性老人などの社会的弱者と言われる人たちがいる。

「人間の心臓を持つブタ」や「クローン（コピー）羊」も出現している。遺伝子、DNAがほぼ完璧に解析できるまでに科学が進歩したいま、「障害児」の抹殺は、抹殺という実感を伴うことなく、この世から葬られ得るだろう。そしてやがて、「クローン人間」が登場し、ぼくが死んでも、もう一人のぼくが生き続ける。いや生き続けさせるに値する人間のみ、コピーが作られることになるのだろう。ナチスの障害者やユダヤ人虐殺は、今日、周到に装いを凝らして、僕達の中に潜む優生思想をくすぐり、破滅への道に誘（いざな）いつつあるのではないか。

社会福祉協議会で働いた二十三年と九カ月の間、そして今も、ぼくが不十分ながらこだわりを続けているのは、「生命の平等な尊厳」ということだ。社協の役割に即して言い換えれば、「少数者」の側に立った問題提起と捉えていただければ分かりやすいだろうか。

「国家は暴力装置である」とかいたのは大熊信行氏だったが、差別を支配の装置として維持する国の政策に追従していく限り、人間の解放は望むべくもない。せめて、これからも「人権」の擁護を目標にしていこうとするならば、「多数派社会のブレーキ役」を自ら任じて、舌を出し続けるというのも不似合いではなさそうに思われるのだが。

〈あなた〉はいま、どのような問題意識に支えられて、日々の仕事を務めておられるか。

注1）高石伸人「資格と人間関係」（『社会臨床雑誌』第四巻　第二号、一九九六）

注2）A・キングレル『ヒューマンボディ　ショップ』化学同人

第5回 全国社協職員のつどい in奈良

～人々と巡り会い福祉に思いを寄せる社協マンの道～

慕情奈良やまと編

まなこ編集委員
志摩町社協　加藤　博貴

今回、地職連の選抜隊として大先輩の若宮町社協の鈴木さんと、そして筑後社職連から八女市社協の高橋さんにとりあえずの僕で行ってきました。まなこ編集委員は、文章を書くことがないということで安心していましたが、今回つどいのレポートを書くはめに……シクシク。

まぁー気を取り直して、皆さんに僕がとても楽しんだことを少しでも伝えられたら幸いです。それでは、緊急発信全国社協職員のつどい25時～眠らない街、いや夜は、眠る街～をお届けします。

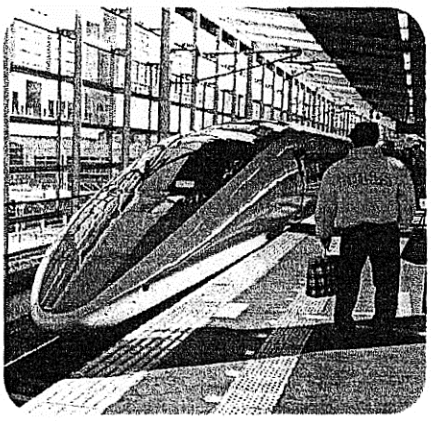
それは、一本の電話から始まった。

急に電話があった時は、「何でぇ！沖縄か北海道じゃ……。まさか役員が奈良県やけん、こいつにでもいかせとけ！」って感じで決まったんじゃないのと最初に思いました。おそらくそれは間違いないと思いますが、そこは、社協に入って2年が過ぎて自分も社協マン（？）らしさが身につき快く後日返事をいたしました。実は、参加するまで全国って名がついているので沖縄・東京・北海道であるときは、いってみたいなぁーと常々思っていたんですが、このつどいは近畿圏でまわっているのを参加して初めて分かりました。

（会長さん勉強不足でごめんなさい）でも、やっぱりいくなら奈良県にと本当に思いながらつどいに参加させていただいたことを申し添えておきます。

（マジですよ）

田舎者500系のぞみに乗る。



女性の制服がとってもキュートでした。

若宮町の鈴木さんの提案であり、この研修の目玉と言えるのが500系のぞみ号の乗車である。しかし、朝の6時半博多駅発は、鈴木さんの住んでいる所から遠く始発もなく、奥さんに車で送って頂いたそうです。（ちなみに私は、妻と子どもが屁こきながら寝ているのを横目に朝4時に起きて独り寂しく旅立ちました。八女市の高橋さんは、マイペースでゆっくりとした時間帯の新幹線で行かれました。）

二人は、早速500系の前の姿が拝みたくてカメラ片手に走って行きました。中は思ったより天井が低かったですが座席はゆったりとしていて乗りやすかったです。

形もカッコよく時速三〇〇キロの新幹線は快適で、車中では、鈴木さんから現在取り組んでいることや、社協マンとしてのおもしろさなど初めてお会いしたにもかかわらず丁寧にお話していただいて大変勉強になりました。

鈴木さんの一言

京都から近鉄に乗換え奈良県社会福祉総合センターがある畝傍御陵前駅で降りたところ、なんて静かでシンプルな作りの小さな駅と正直思い、きっとホームから改札抜けてすぐ階段がありスロープぐらいは付いているだろうと社協マンらしく車イスや高齢の方を気にしつつ辺りを見渡すとなんと！あーるじゃありませんかエレベーターが、小さな駅なのに上に作らず地下に改札口を設けてあり全てにエレベーターが設置されていました。後で、お聞きすると社会福祉総合センターができたのでそれにあわせて作ったということ。鈴木さんが一言「春日市にはない！」。「えーそうなんですか？近藤さん」僕の心の叫び。

ドラゴンが出迎える!!

畝傍御陵前駅のエレベーターを地上に昇るとすぐななめ前に奈良県社会福祉総合センターが見えます。さっきの事もあり感心しながら歩いていくと突然！噴水の真ん中に龍が立っていて口から水を吐いているじゃありませんか。何で？あるのと疑問を持ちながらも少しドキドキしながら記念撮影をしまくりました。（お茶目な福岡県人）

点字ブロック見ればわかる!?

するとその時、一人の気立ての良さそうなおばあちゃん（見た目）が龍の後ろを回って通りすぎていく姿をみて、自分もせっかくここまで来たのだから龍を見ながら前を通ろうとした瞬間！なんと水がかかってしまいました。（きっとおばあちゃんは、風が強い日は水がかかると知っていたにちがいない）

前置きの終焉

もう、だいぶ前置きが長いので、これを読んでる人も少なくなってきましたが、珍道中じゃないのでレポートに入りたいと思いますがその前に一つだけ我慢して読んでください。

八女市社協の高橋さんの謎!?

福岡県社協の研修会でよくみかける高橋さんは、年上のベテランさんで声すらかけにくいところがありましたが、一緒の部屋で年齢を聞いてびっくり！自分より2つ年下の26歳じゃないですか、しかも保父資格を持ちバイエル一〇〇番まで弾けるこの男、一体何者。さらにこの後の交流会でアルコールを飲めない彼が全国相手に年齢当てクイズをするなんて、この時点では、思いもしていなかった二人であった。（僕は、ちょっぴりダシに使おうと思ったけど……。もう今回の研修会での収穫は、彼に知り合えたことですね）

料理が余って勿体ない？

いよいよメインの大交流会のはじまり、はじまり。

さて、挨拶もしたかどうかで始まったこの交流会（乾杯だけ覚えている）「楽しかった」の一言。これは、すべてに共通することですが、とにかく堅苦しくない。（ネクタイしてるの福岡と北海道だけかと思ったほど）簡単に言えば、みんな、めっちゃ！アホやねん。いや、きっとアホがつくほど熱い思いを持った社協マン達だったんだろう。なぜなら料理がほとんど残るほど話に熱中していました。そして、二次会、三次会と夜はふけてゆくのでした。

後輩との出会い。その時ぼくは

つどいに参加して、一番うれしかったことは、サークル（大学）の後輩に出会えたことだった。長野県のどこかの市町村社協にいることは、風のたよりで聞いていたが、まさかここで会えるとは思ってもいなかったので軽く抱きしめてやった（女の後輩だったら力強くになるだろう）。彼は、毎年つどいに参加しているらしくて、つどいで出会った人達とネットワークを作り旅行や遊園地（？）にも行ったりしているらしい。しかし、彼は言った「もう、社協はやめました」なんでも、勤めていた社協に専門員として入ったが、行政の都合でコロコロと担当が変わることを甘んじて受入れる会長局長に嫌気がさして辞めたようだ。実際、自分も専門員から配食・デイの運転手にと簡単に変えられたらと思うと人ごとではない。それから彼は、社協はつぶれるとか、社協はこうあるべきとか語りは

じめたが、その言葉一つ一つに自分の夢や希望が含まれていて社会福祉協議会そのものに嫌気がさしたのではなく、自分の勤めていた社協体制の弱さに失望した様子だった。「肢体不自由児施設のソーシャルワーカーに転職してもつどいに毎年参加しますよ」と言った彼は、社協の夢限の可能性を信じている本当の社協マンに違いないと心でガンバレよ！とつぶやいた（その時ぼくは、カラオケ本を握っていた）

とりあえず分科会をご紹介します

第一分科会　鈴木さん（若宮町）参加
　社協職員の甘えの構造
～なんで君はそこにいるの～

第二分科会
　社協ワーカーの「ものさし」づくり
～ダイヤグラムで社協スキャン～

第三分科会　加藤（志摩町）参加
　社協職員5年以下のつどい
～あこがれを現実にする力、あなたのそれ以上を可能にしよう～

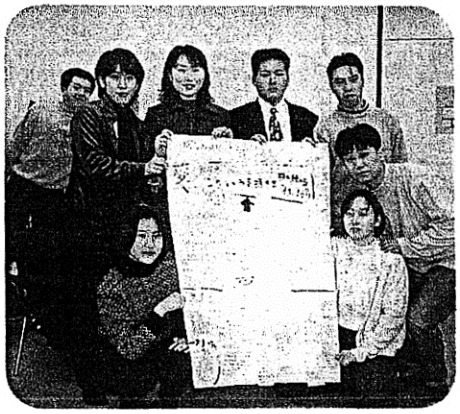
第四分科会
　情報活動に強くなろう!!
～口コミからインターネットまで～

第五分科会
　社協のおもしろさ再発見！
～社協の原点、魅力を再確認する～

第六分科会　高橋さん（八女市）参加
　社協っていったい何？
～ひとりの住民として明日の社協を考える～

以上の六つですが、自分の分科会に夢中になり、他は取材出来ず。どうしても知りたい方は、多分、報告書が来年までにできるので関コミから送ってもらってください。第四回のは、一冊五百円でした。（なんや、「まなこ」で報告いらんやん）

ねるとん方式……ワクワク


みんなのせたぞー!!

自分がでた分科会ぐらいは、皆さんがほしい情報を届けたいと思っていたのですが、なにしろゲーム方式で交流を深め、新しい出会いをつくりながら、グループに分かれて未来の社協を語り合う、「愛」を育む秘密パーティー。地職連の皆さんごめんなさい、なーんにもありません。仕事のことを忘れて本気で世間一般社協話（ある、ある、うちもある話）をしてしまいました。ただ一つみんなで確認したことは、プラス面は、地域、ボランティア、他との関係など社協の外にあり、マイナス面は、社協の中にあるということでした。プラス面があるからこそがんばれる、地域にでること、住民に社協が見えること、住民サイドの社協等、その夢や熱い思いを持ちつづけること、好きだからこその力、それは、テーマにあるゆとりを持つこと？いや、ゆとりがあるから正しい答えがでるとは限らないし、日々あわただしく過ぎていくなかにも納得できるときがある。この分科会は、情報を得て、地元社協に持ち帰る分科会というよりも、少しの夢と多くの現実を楽しく共有することでとても楽しく過ごし、また、がんばろうという気持ちになった分科会でした。（ところで、ねるとん方式は、どうなったの？）

本当楽しかったです。みんなありがとう。

パフォーマンスが大事!?

二日目の午後の講演は、社会就労センターたんぽぽの家の村上良雄施設長からの話をお聞きしました。「暮らし」「仕事」「遊び」「学び」という人間が生きていくうえで、必要な条件をトータルして保障することをめざす「たんぽぽの家」は、福祉だけを問題にしているのではなく、自分たちが生活している地域社会全体を変えることに主眼を置いている。その運動には一切妥協はない。障害者が作ったものだからと集めて売れば、レベルを低く見られる。それよりも、キラリ輝く個性をだして、モノ自体に付加価値をつける。そして、回りで支えるスタッフが最高の環境・超一級の舞台を用意して、そのことで世間に問い、認められることによって社会に評価され地域を変えることにつながるという。つまり、パフォーマンスがとても上手なのである。社協が何しているかわからない、行政と同じ様にみられる悩みをもつ社協にとってパフォーマンス（人目を引く行為）は、ひとつのキーワードに思えた。

地域の人たちにアイデアが
いっぱいあると熱く語る先生

祭りのあと

その日のうちに、福岡に帰ることになっていたので、いそいで電車に乗り、奈良公園に向かいました。興福寺、東大寺、奈良の大仏を通り過ぎ（？）鹿とたわむれ（おねえちゃんがよかった）お土産を買い込み新幹線に乗り込んだ。博多に着いて、おまちかねのギョーザとビールで乾杯、博多ラーメンを食べながら今回の研修について、鈴木さんと確認しあった。

～遠くていけないなら、近くに呼べ～

（あ、言ってしまった）関西も元気やけど、福岡も負けてない、負けてない、きっとやれるよ前田さん（甘木市）。あ、また言うてもうた、ごめんなさい。最後に、行かせていただいた地職連の皆さんと楽しませていただいた関西コミュニティワーカーの皆さん、そして、大変お世話になった若宮の鈴木さんと八女の高橋さんに感謝申し上げます。

おつかれさまでした。or(どちらか)全体にかたぐるしくない雰囲気のつどいでした。

あとがき

しかせんべいを思い出の一つにと持って帰りました。それを食べたうちの社協のFさんが「なつかしい味がする♡」と大変喜ばれていました。（彼女の前世は、鹿にちがいない）

「関西の人は、ほんまに元気やで」

若宮町社協　鈴木幸則

皆さんの代表として、奈良県橿原市で行われた全国社協職員の集いに参加させていただきました。

今回は、県内から3名が参加し、福岡の恥をさらさないようにと心がけたつもりですが、その珍道中とパフォーマンスは、加藤君が紹介しているように、少しインパクトを与えてしまったようです。（来年参加される皆さん。申し訳ありません。）

・すっごくええで「500系のぞみ」

ミーハーな私たちは、せっかく新幹線に乗るのなら、今CMで流れている流線型のかっこいい「500系のぞみ」に乗ることにしました。その乗り心地のよさ。「ただいま時速三〇〇㎞で運行中」という表示を見て「すっげー」といいながら、京都までの旅を楽しみました。

ところで、今回乗った「500系のぞみ」と従来の「のぞみ」は、各車両のドアは狭く、車イスは通らないようでした。でも、中央近くの1つの車両だけはドアが広く取ってあり、座席の一部を取り外しての車イスの固定装置や、ボタンによる自動ドアの車イス優先トイレもありました。お堅い？JRも段々とハンディーに対する対応が深まっているようですね。

・分科会では理想の社協職員像を探る

私の入った分科会では、「社協職員の甘えの構造～なんで君は、そこにいるのか」をテーマに、理想の社協職員像を探り、自分自身を見つめ直そうというものでした。

理想の社協職員像？そんなもんを探ってどうするの？という疑問を持ちながら入った第1分科会、そこには、関西はもとより北海道、愛知、広島、鳥取などから28名が参加しました。

生駒市社協の多田さんの、丁寧な司会進行により、3つのグループに別れ、「家族・友人」「住としての地域」「職場の人間関係」「職場としての地域」の4つの観点から、KJ法の手法で探りました。その結果から見えた理想の社協職員像とは、「家庭・職場・地域、すべてにおいて、みんなの幸せを考えて福祉を実践し、なおかつ情報収集と勉強を怠らないで、積極的にがんばる。それでもストレスを抱えない、いつも笑顔の社協マン。」

すごい。こういう人がいるのなら会って見たい。でもこれ、裏を返せば、自分に欠けている所が見えてくることになるのですよね。

じゃそのための対策は？みんなで考えたのは、「家庭を犠牲にしない努力をする。住んでいる地域では、職として言っていることを実践する。職場では人間関係を大事にし、流動性を前提に業務を分担して、常に向上心を持つ。地域では、社協の顔となって、自立のための援助に徹し、地域に出ていける職場作りとして、職員間の情報を共有し、マニュアル化して柔軟に対応をする」そうだよね！と思える人も多いと思います。でも、この事を日常業務の繁忙に押しつぶされて、回避している事が多いのです。「忙しい」この言葉ですべてを片づけている。そこに甘えの構造があり、「ゆとり」をなくす原因にもなっている。じゃあこのままでいいのか。社協の仲間内ならそれでもいい。でも地域住民は、「自分の用が足せるかどうか」で社協を判断する。だから私たちは、「理想」に近づこうという自己変革の目標を持ち、努力する必要がある。結論として、このことを共通認識として持って帰ることになるのですが、しかしながら、この周到な仕掛に、スタッフの皆さんの意気込みのすごさを感じました。

・ほんまに関西の人は、元気やで。

1日目の夜は、ホテルで交流会があり、その後、大会事務局から案内があった2次会へ出かけました。

なんとそこには、参加者の半数近い

70人ぐらいが押し掛け、とりわけ関西地区の方が多く来ていました。店自体大きくはなかったので、すぐに貸切の状態になり、男・女入り乱れて（乱交パーティーではないですが）あちこちで福祉論議に花が咲き、それぞれの思いをぶっつけあっていました。この光景、一昔前までには、福岡でもあってたような気がしますが、そのパワーのすごさ。「ほんまに関西の人は元気やで」とつくづく感じました。

・社協職員に期待すること

2日目の全体会での「たんぽぽの家」施設長村上義雄氏の講演では、社協職員に期待する事として、「仕事は創り出すもの」「アイデアは地域から学ぶ」「多様さが必要」「委託体質から脱却を」「どちらに顔を向けるのか」という5つのキーワードが提示されました。

最後に、松金功さんの「障害者に迷惑な社会」を紹介され、「これからは、自分たち自身で問題解決への自己決定をし、自分たちの生き方を選んでいく。そのような成熟した市民社会が求められている。相手の気持ちを理解する努力をつづけていかないと、市民社会はできない。社協にはいろいろなところで期待したいし、協働して手がけていきたい。」と話してありました。

・パワーを少し分けてもらった気が

今回の集いに参加し、関西の皆さんのパワーとインパクトの強さには、正直なところびっくりしました。そして、そのパワーを少し分けていただき、元気になったような気がしています。

最後に、地職連のご厚意により、すばらしい研修をさせていただいたことに厚く感謝申し上げます。

「第2回社会福祉協議会と介護保険セミナー」レポート

苅田町社協　福山　直樹

このセミナーがあったのは、昨年の9月、すでにニュース性はないし、記憶も薄れているので、お話のあった各氏の印象的な部分を掲載して、報告に代えたいと思います。

セミナーは、午前も午後も一方的な話のみで、とても疲れるものでした。

トップバッターは全社協常務理事・松尾武昌氏

「地域福祉の中で、社協事業と介護保険の関係をどう整理していくのかが問われている。今までの経験を生かして事業を展開していって欲しい」

（※この場合、展開する事業は介護サービスのことだと思います。私は、今までの社協活動の経験が介護サービスに、どういうふうに生かされるのだろうか、と疑問に思いながら聞いていました。）

二人目は、厚生省介護保険準備室・佐藤信人氏

「地域福祉を担う社協にこそケアマネージメント機能の中核を担ってほしい。保険サービスだけではなく、市町村サービスやボランティア、NPOなどトータルなサービスの構築をして欲しい。社協にはボランティア活動などインフォーマルな部分を含めたケアプランを期待します。」

（※ボランティア活動の主体は社協にあるとでも厚生省の方は思っているのでしょうか。こんな話をボラ連の役員会の中で話したら、どんな目に遭うか、と想像するだけで私は背中がぞっとしました。）

三人目は、全社協地域福祉部長・和田敏明氏

「家事援助では経営が成り立たない。社協は寝たきり老人世帯などのニーズを深いところから顕在化していない。介護型ホームヘルプサービスの展開を積極的にして欲しい。」

（※さすがに厚生省の佐藤氏のボランティア発言には批判的でした。でも、社協経営路線一辺倒の話し方にはどおーっと疲れを感じました。）

四人目は、シルバーサービス振興会主席研究員・山崎敏氏

「企業は、社協を競争相手としてどう見ているのかと言うと、今のままでは全く怖くないと思っているところがほとんどのようです。

（※はい、その通りです）

五人目は割愛します。

六人目は、宝塚市社会福祉協議会在宅福祉課長・佐藤寿一氏

「利潤を追求する職場がいやで、社協に入った人間がほとんどなのに、その社協で利潤のことを考えなければならないようになるとは…」

（※はい、同感です）

七人目も割愛します。

てなわけで、今回のセミナーは当然のことながら、介護保険漬けでした。現実的には避けて通れないことなので、全社協の意見も拝聴しながら、対応していくしかないのでしょうが、逆にこれまで以上に本来的な組織化活動の内容が問われることになると思います。

セミナー終了後、同行した県社協の勝野君とヘルパー連絡会会長の泊さんの三人で難波の「花月」横で念願のたこ焼きを食べました。これが気楽な旅行だったらなぁーとしみじみ思った次第です。（ここのたこ焼きはおいしいよ。ほんまでっせ）

「ふれまちの効果を探る」

平成3年度より始まった「ふれあいのまちづくり事業」は、いったいこれまでどのような効果を生んだのだろうか。既に指定を受け、終了した久留米市社協と田川市社協よりその効果等について報告を行ってもらう。

動きだしたネットワーク活動

田川市社協　十時　智治

人件費つきの国庫補助事業があるということで、中身を十分検討することなく飛びついたのが『ふれあいのまちづくり事業』。一応五年後に見直しすることにはなっていたが、まさか打切りはあるまいと安易に解釈していたにもかかわらず、話が二転三転し、一部分が一年間の延長はあったものの、結果的には打切りとなってしまった。

事業終了後の人件費の確保には苦労したものの、職員についてはとりあえず一人増で落ち着いた。

「では、その成果は？」と聞かれると、何とも説明がしにくい。

たしかに多額のお金を使っただけの成果があったかもしれないが、むしろ終了後に与えた影響の方が大きすぎて。

とは言え、とりあえず一応の事業はこなしてきた。（つもり）

まず最初に着手したのが『ふれあい福祉センター事業』で、これまでの週二回の心配ごと相談所から、相談員を常設し、さらには法律・在宅介護・家庭教育相談等の専門相談員を配置するなど、受入れ体制の整備をしていった。また相談の処理についても、内容によっては相談員が関係機関等へ相談者に同行して解決を図るなど、きめ細かな対応をしていった。

それらの結果がもたらしたものは、単なる相談件数の増よりも、これまで解決が難しく、適当に処理されてしまっていたものや、他の機関等へ回されるなどしていたものが、きちんと解決されるまで相談員がとことん関わっていくことにより、住民のこの『相談所』に対する存在と信頼度が高まる結果にもつながった。

次に市区町村選択事業では『小地域ネットワークづくり事業』を選択したが、この事業はすでに県内どこの市町村社協においても、この取り組みは実施されているにもかかわらず、本市においてはなかなか地域関係者の賛同を得ることができず、これまでおざなりになっていた。

この指定を契機に、民生委員や町内会長等の代表者と何度も協議を重ね、この事業の趣旨や目的を説明し、まずこの事業を進めていくための拠点として、全市に『校区社会福祉協議会』を設置することの必要性を理解してもらうことに務めた。

一応の賛同は得たものの、いざ設置となるとすんなりとはいかず、地域関係者の中には、これまで福祉問題とまったく関係のなかった者や、ほとんど必要性を感じていない者も多く、加えて「わずかな事業費で何ができるのか」と言った疑問も上がるなど、校区での話し合いもかなり難航した。

何度かの挫折はあったものの、とりあえず設置されたことにより、初めて校区レベルに福祉活動を進めていくための拠点ができたことは、一応の成果と言えよう。

今後ここを拠点に、いかにして本来の目的を達成していくための事業を推進していくかが、大きな課題として残っている。校区推進者の中には、「一人暮らし老人の集い」など、単発的な行事を実施することを目的と理解している者も多く、要援護者等の見守りや安否確認、生活支援等、日常活動を目的としている事業であるということに考え方を切り換えさせるのに苦労した。

さらに、このような事業を展開していくために、校区から町内会単位へと拠点をしぼり、民生委員を中心に『○○町福祉ふれあい会』なるものをつくり、要援護者の助け合いの輪を広げていこうとした。

しかし、このねらいも民生委員個々の熱意によってかなりの地域差があり、まして強制するわけにもいかず、積極的に取り組もうとする地域と、逆にまったく関心の示さない地域もあるなどの弊害も生まれたが、先進地域が他の刺激になればという程度で、特にてこ入れをするようなことはしていない。

何の事業を実施しようとしても、常に足並みが揃わないのが田川といったところだろうか。

地域の要援護者を支援していくことにいち早く取り組み、対象者のニーズ調査と把握、さらにそれを援助していくための地域ボランティアの発掘と育成など、手探りながらも試行錯誤しながら、住民の福祉ニーズの需給調整をしていく組織を小地域ごとにつくっていこうとしたのだが、残念なことに、いまだ全市的な事業へとは展開せず、今後の大きな課題と言えよう。

最後に『福祉施設地域福祉活動啓発事業』の取り組みだが、これがまたやっかいな事業で、社会福祉施設の設備及び施設職員の知識、技術等を地域の援助対象者に提供しようという趣旨のもので、施設との連携が取りにくく、しかも「指導員」を配置しなくてはならないとしているが、現実には施設内職員の兼務となってしまった。具体的な事業についても、在宅介護講座や入浴・移送・福祉機器の利用サービス事業、在宅介護相談所の開設など、特に目立った事業はできなかった。

ただこのことにより、普段から閉鎖的になりがちな福祉施設を、広く住民に知ってもらうきっかけとはなったような気がしているが。

終わりに本市における『ふれまち事業』の総体的な評価として上げられるのが、これまで取り組みが遅れていた

「小地域ネットワークづくり事業」に遅まきながらも、地域住民が必要性を感じ、さらには具体的な展開を図っていこうという動きが芽生えてきたことが上げられる。

しかし、これらも単なるきっかけに過ぎず、今後はすでに取り組みを進めている地域を中心に、全市的な事業へと展開させていくことが、この事業の成果となろう。

ふれまち事業はやる気で決まる

久留米市社協　松尾　誠治郎

一九九一年から始まった通称「ふれまち事業」は、市町村社協の地域福祉活動活性化を目的に地域福祉担当職員の増員、総合相談活動の定着化、小地域ネットワーク活動の普及、福祉施設との連携、地元固有のモデル事業の普及など五本の重点柱を掲げていた。また補助金額の大きさもあって、この事業は鳴り物入りでスタートしたことはご承知の通りである。

しかし、一九九六年に当該事業は実施要綱改正がはかられ、かなりの見直しと修正がかけられてきたのである。

特に全社協は、一九九四年から事業型社協を提唱し、介護保険事業経営の推進を前面に打ち出してきた。そのため、この補助事業がそのエネルギーを住民参加活動つまり、コミュニティワークにかける傾向のために、邪魔物の感がいなめなくなってきたはずである。だが、全社協の意図とは別に「ふれまち事業」に取り組んだ多くの社協が何らかの形で前進をみたのは確かである。

これについては、一九九七年三月・全社協から「ふれあいのまちづくり事業と社会福祉協議会・事例集・『地域での生活を支える住民参加の福祉活動』」という冊子に取りまとめられているので、全国的評価・効果の情報については、それを参考にした方がよい。

また、「ふれまち事業」の推進状況や進捗状況については、「月間福祉」「社協情報ノーマ」や毎年開催の「市町村社協活動全国会議」や「全国ボラ・フェスティバル」「九州ブロック地域福祉活動研究集会」などにおいて随時発表や討議・情報交換の機会が設定されてきたので、日ごろ地域福祉活動に熱心な社協職員なら、ご承知おきの分野であろう。

全社協の最近の発言を聞くと介護保険事業（ヘルパー事業・在宅介護支援センター事業・デイサービス事業・場合によっては訪問看護ステーション等）の経営への連携をはかりつつ小地域ネットワーク活動・いきいきサロン活動・当事者の組織化支援活動などの住民参加支援の地域組織化活動の分野を再評価すべきと強調している。この点、前記の動きと相反し混迷の体を生じているが、基本的に重要な活動分野であるのは確かである。

さて、「ふれまち事業」の効果を久留米市と全国の特徴とダブラせて記述しておこう。

一《**職員の増員について**》は、指定を機会にプロパー職員の新規採用と専従相談員の設置をみている。これは、当初この事業で職員確保ができることを補助金の積算内訳で説明して来たことに由来する。指定解除とともに人件費や賃金が付かなくなったことはご承知の通りで、市行政からこの種の補助金への不信感イクオール社協の見通しの甘さとして言及されたのは、全国的に同じであったはず。しかし、本市は継続的に保証してくれたが、警鐘となるべき課題となったのは確かである。

二《**地域住民が支援活動に係わる小地域ネットワーク活動について**》は、全社協製作のビデオ「支えあうたしかな手」や一九九二年八月号や十月号の「月間福祉」に、また一九九七年五月号の「ノーマ」や全社協出版「社協活動マニュアル②小地域福祉活動の手引き」などで紹介されている。また「九州ブロック地域福祉活動研究集会」や「第九回日本地域福祉学会」や「西日本社会学会」でのパネラーとしての発表。最近では、中央法規より出された「現代コミュニティワーク論」のコミュニティワークの実践事例のトップに紹介されている。こうしたことで、本市の「ふれまち事業」は、対外的には知れ渡っている。

このネットワーク活動分野では全国の当該事業指定社協の八五％が取り組んでいるが、本市は一つの運動モデルとして参考にしてもらっている。本市では住民が支援ボランティアとして約二千人（民生委員含む）ほど係わっているが、全国では平成七年度末で十七万六千四百人も係わっていると報告されている。しかし、要は活動の中身と質が問われるべきだが、住民が要援護者の生活支援にかかわっているこの動きは、住民主体の活動として力を注ぐべき活動であろう。ちなみに本市のネットワーク活動ボランティアの意識調査によると「この活動は自己課題として続けたい」とする人が、九四年で八七％。九七年で八八％という高い意識であることを付記しておく。

小地域ネットワーク活動は個別支援と小集団支援活動があるが、前者はよく知られているのでかなり省略するが、①訪問対象者は一人暮らしの高齢者であれば、約三千五百人の内、五一％が、高齢夫婦なら十三％が該当しており、ネット対象者としての補足率はかなり高い事が分かっている。また、週二～三回以上の対象者は一人暮らし高齢者は、約二五〇ケースとなっている。

②協力するボランティア数は、前述の通り約二千人であるが、他市にみる五十世帯に一人という福祉委員制度と遜色ない数値になっている。などを背景にして、個々の高齢者の生活支援を着実に支えてきた実績は評価できよう。

次に、後者は「いきいきサロン」の形で、二十七校区中、十九校区で実施し、それもさらに小さな班単位へ普及しており、年平均六・六回の開催とな

っている。この分野は全国的にも普及し始めている分野であり、今後運営の工夫や組織化開拓が問われている。

また、本市では「ふれあい型の食事サービス」あるいは「介護者のつどい」などの活動も着実に拡大していったことは確かである。

三《**ふれあい福祉センターによる相談について**》は、指定を受けた翌年度の平成四年度から、メンバー数や専門分野の増員、専用相談室・専用電話の設置、専任相談員の設置を行っている。

また、全ての民生委員を相談員として、小地域ネットワーク組織の班長か副班長として位置付け・係わってもらうことで、訪問するボランティアとの連携を密にしていった。それにより、相談件数は毎年四百件ペースで伸び、中でも高齢者関係の相談は取り扱い件数の平均三五％を占めるほどとなった。こうした事業推進には地域福祉活動コーディネーターの存在と機能発揮の力量が左右することとなるが、本市のコーディネーターやスタッフの存在も無視できない。全国の立場でみれば「ふれまち事業」を通して、社協活動が活発になったと評価しているのは「福祉施設」からみて九一・四％。「民生委員」からみて九八・六％が「活発になった」と答えているという。財政危機で当該事業の推進パワーは鈍化ぎみではあるが、社協活性化の起爆剤のひとつになるかどうかは、推進する側のやる気で決まりそうである。

〈連載〉　県内名物ボランティア

県内にはさまざまな分野で活動を行っているボランティアの方々がいらっしゃいます。今回からの連載として、その中でも特に興味深い活動をされている方々にスポットをあて登場していただき、それぞれの思いを語っていただきます。

第一回目は、杷木町よりバナナの叩き売りを始め、竹細工や縄細工を特技に各施設や小学校等に訪問し、活動されています井上輝雄さんをご紹介いたします。

質問1　井上さんがボランティア活動を始められたきっかけをお聞かせ下さい。

私のおやじが眼を悪くして、義太夫であちらこちらで皆さんに相当お世話になったから、私が仕事をやめたなら皆さんの役にたつことがあれば、何かやってみたいと言う気持で始めました。

質問2　どうしてバナナの叩き売りを始められたのかお聞かせ下さい。

以前から興味があったので、我流で少しはやっていたんですが、本格的に勉強したいと言う気持ちから、6年程前にＮＨＫの『のど自慢大会』が地元の原鶴であった時に、ＮＨＫの方から門司の松永さんと言う本場の方を紹介してもらい、習い始めました。

例えば、八幡の企業祭とか宗像の大道芸能祭りがあるとき等は、案内があるので出向いて行き、先輩たちの舞台に上げてもらい後から「こう言うときは、こうしなさい」と、言う手ほどきを受けながら勉強したり、先輩たちの舞台をテープに録ってきたりしながらいろいろ参考にしました。だから、月に1回から2回くらいは北九州まで通っていました。

質問3　現在はどのような活動をされていますか。

社会福祉協議会からの依頼の他には病院に慰問に行ったり、朝倉郡内や筑紫野市の方の特別養護老人ホームや筑豊の施設、あとは北九州の方の身体障害者施設等に訪問しています。

町のフェスティバルということで色々な行事、例えば文化祭や夜市、町の金婚式等にも出掛けて行きます。

老人クラブ関係では杷木町の老人クラブがほとんどで、老連主催の文化発表会『いきいき祭り』や、たまには他の町村の老人クラブからも依頼を受けることもあります。

それにこれは、ボランティアと関係ないんですが、酒屋なんかで新酒の出た時に行われる『樽おこし』や、宗像である『大道芸能祭り』なんかに招待されることもよくあります。

この前は、杷木町の小学校から依頼があったので行ってきました。これはバナナの叩き売りではなく、竹とんぼや竹馬、縄細工等を教えて来ましたが、子ども達に教えるのは難しいですね。

とにかくナイフの握り方や竹の削り方が分からないので、そこから教えなくてはいけないし、しめ縄作りにしても同じことで縄のない方、例えば左縄や右縄から教えなくてはいけなかった、またその時は、親も一緒でしたが子供達と同じように、ナイフやノコ等の使い方が分からない親がいたのには驚きました。

子どもたちだけに教えるどころか、親たちにも教えて来ました。

質問4　ボランティアの立場から見た町社協並びに町行政へのご注文、ご意見をお聞かせ下さい。

今の町会議員の中に町のためにボランティアをする人とか、一人もいないように思います。もう少し役職を持った方々が積極的に活動に参加してもらいたい。

また、住民の中ではそれぞれにボランティア団体を結成してさまざまな活動を行っていますが、個々の団体の活動だけに終ってしまっているようなので、それぞれのボランティア団体の連絡調整をやってくれる機関を役場若しくは、社協の方で設置していただきたいと思います。

今日は、お忙しいところありがとうございました。

◎本人へのお問い合わせ先
住所　杷木町大字松末1814の2
氏名　井上　輝雄
電話　0946－63－3323

フリートーク

奥歯のような社協を目指して

大野城市社協　岡部　則彦

みなさん、歯大切にしてますか。私もそれなりに大切にしていたつもりでしたが、ひょんなことから約十年ぶりに歯医者さんに診てもらったら、なんと三十本のうち九本が虫歯、ショックでした。子どものころからあの歯を削る音がどうも苦手で、本当なら虫歯でも痛まない限り訪れることもなかったと思います。

そもそものきっかけは虫歯の治療に通いはじめた妻と長男を迎えに行ったときのこと。十七年間愛煙し続けた煙草をやめたので「残った歯の裏のヤニを何とかしたい」などと考えながら待っていたところへ妻が治療を終え戻ってきました。「ここの先生は若い女医さんで優しかよ。」その一言に、ちょっとスケベ心を出してしまったのか、ふと気づいたときには私の予約も入っており、次の週から親子三人で仲良く通うことになりました。

今まで一日二回磨くことで自分なりに歯を大切にしていたつもりでしたが、私の口の中を覗き終えた先生は開口一番……

その一…『利き腕は右手』
その二…『固めの歯ブラシに』
その三…『歯磨き粉をたっぷりつけて』
その四…『最初に右上の横側の歯を』
その五…『四、五本まとめて』
その六…『ごしごしと強烈な横磨き』

「長年の間、くり返しやってきたことが全部歯に表れていますよ」との鋭い指摘に、反論もできずただうなずくだけ。全て当たっていました。恐ろしいことに私の歯の約十本は、必要以上の研磨剤を使い間違った磨き方により歯の根元が削り取られ、自分自身の手によって葬り去られようとしていたようです。しかし、今回わたしのちょっとした好奇心？（「スケベ心」ともいう。）から最悪の状況を免れて、改めて正しい歯の磨き方が歯にとっていかに大切なことかを痛感することができた。

本来、歯は噛むことで食物を体内に入れやすくし、栄養へと変えていく大事な使命とともに、脳へさまざまな情報を伝えるという役割を担っています。これは今後住民の求める社協像そのもので、「社協の存在意義は？」「本当に住民主体なの？」「まだまだ行政の下請けね」……etcなどと言われながらも、如何なる状況においても万全を期して、常に住民のニーズに反応することのできるそんな社協を目指さなければならない。こんな時代だからこそ、固いものでも木端微塵に噛み砕いてしまう、そんな力強い奥歯のような社協の姿が求められているのでは…。

黒船襲来

大牟田社協　内田　勉

あちらこちら至るところで介護保険の情報が飛びかっている。介護保険に関しては、各々の市町村社協の考え方、また個々個人の考え方はさまざまであり「信長型」か「秀吉型」か「家康型」かその各々の動向が多少気になるところである。

それでは、自分自身はどうかと言うと、これもまたどれを選択すればよりよい方向に社協が向かうのか迷ってしまう。ただ、今までの社協史の上で「介護保険導入」を日本の歴史にたとえるならば「黒船襲来」級のショッキングな出来事であり、これがのちに「倒幕か維新か」はたまた「衰退か繁栄か」の路につながっていると考えている。まさに社協にとって待ったなしの状況が訪れており、社協史上、重大な岐路をむかえていることは間違いない。

このような状況のもと、我々は、今

何をなすべきか？この重大な岐路を社協経営陣だけにまかせてよいのか？今後の展開を、全職員が「対岸の火事」としてではなく、危機感を持ちながら大いに議論し、十分に検討する必要があると思う。また、「介護保険制度」を損得勘定の対象だけでなく、社協の組織力・地域力を駆使し、高齢者の商品化を阻止する役割を担うことなども含めて多面的に検証し、導入前にも行政に対していろいろなアクションをおこすことも併せて必要だと思う。

とにかく、今やるべきことは1つ、「備えあれば憂いなし」だ。

共に立つ

杷木町社協　池田　孝司

檜は尾根、杉は谷と言われて、いい杉の木ほど谷の深い所、靄の立ちこめる所に育つ、吉野杉と言えば、九州の屋久杉、奈良の春日杉と共に日本の銘木と歌われて、日本間の天井板、長押、鴨居などに用いられ、特に最高の建具材として珍重されている、それは柾目が通っていて色も赤く美しいからである。

吉野杉は、奈良吉野の川べりに沿ってうっそうたる美林を形成していて、渓流の水煙の中から斜面を緑一色に染めてはい上っている、その美しさ鮮やかさは釣人達の目を楽しませてくれる。

植林された杉苗は仲間と肩を並べ、ひと固まりとなって身を寄せ合い、風雪の中にお互いを励まし合いながら生育する、近くの友木の事を思って横に枝を張り出す事をしない、ひたすら天に向かって伸びるだけだ、だから真っ直な節の少ない木に育つのである、友達と言う言葉はここから生まれてきたのではなかろうか、共に立つと言う、意味ではなかろうか。

その反対に野中の一本杉と言う言葉がある、仲間から遠く離れてたった一人で立っている杉の事である集団の中にいないので他を返り見る必要がない、勝手きままに枝葉を突き出しせっかく吸い上げた土中からの成分をわき道の方ばかりへと流してしまって、本体はさっぱり伸びない、素直な直木になれないで節だらけの木になってしまう、こうゆう木は値が安い、用材として使い道が少ないから、人が振り向いてもくれない、人間にも野中の一本杉の様な人もいる、孤高の高さを誇るなどと言うが果たしてどれだけの値うちがあると言うのだろう、一匹狼と呼んでいい気になっている人もいるが、それははぐれ狼と言うべきだと思う、狼でさえ集団でいるからこそ他の動物から怖がられるのであって、一匹の迷い狼はかえって餌食になりやすい、一人よがりの人間ほどもろいものはない、良き友を持つ事こそ人生の幸せなりと言われる、語るに友もなく切磋琢磨してくれる相手もないとしたら、寂しく人生を過ごすだけでなく人の世になんら役立つことなく一生が、終わってしまう。

仕事の上にも良き友を持ち、いつも声をかけ合って勇ませあい励まし合って、お互いが共々に精進する事が大切だと思う。

子どもでさえ、親の教育よりも友達同士の中から学ぶ事の方が多い、友を持つだけでも人生に救いが生まれて来る。

社協マンの心得、「4つのW」フットワーク・ヘッドワーク・チームワーク・ネットワークの原点は、共に立ち合う事が一番大切であると思う。

「我が家の師たちよ」

豊前市社協　岸本　俊一

我が家は、妻と大希（7歳）、亜沙美（5歳）の二人の子どもの四人家族である。

私の父親像は、笑いの絶えない家庭の中で、子供たちとよく遊び、しかし威厳を持ちながら、健やかに育つための環境づくりをする大黒柱と平凡に考えている。

先日家族で食事に行ったとき、店から子どもたちに、

「絵を書いて下さい。抽選で海外旅行が当たります。」

早速大希に、

「海外旅行が当たったら、どげんする？」

と聞いてみた。よく家族で旅行に行くので、当然自分が行くと答えると思いながら……しかし、

「もし当たったら、おばちゃんにやる。だっておばちゃん、旅行が好きだもん。」

との答え。また家でも、おやつ等を食べるとき、その場にいない私や妻に、

「お父さん、何コいる？」

「お母さん、イチゴはい、どうぞ。」

と言ってくる。

私の中に、この優しい一声をついつい忘れているのではないかと反省。

妹の亜沙美は、赤ん坊のころから、指しゃぶりをしていた。指しゃぶり等

をするのは、精神的に不安があり、二人目ということで、親の愛情が薄いのではないかと心配していた。

どうすれば、やめるか。何時やめさせるかと考えていた。

5歳の誕生日を前にしたある日、まあ無理とは思いながら期待を込めて、

「5歳の誕生日になったら、チュッパ（我が家で指しゃぶりのこと）をやめようね。」

娘も、

「うん。5歳になったらやめるね。」

私の心の中では、ほんとかよーという思いであった。それが、5歳になった途端、チュッパをやめてしまったのだ。

私自身よく妻から、

「おフロは？」

「あとで。」

「ここ直して。」

「また今度。」

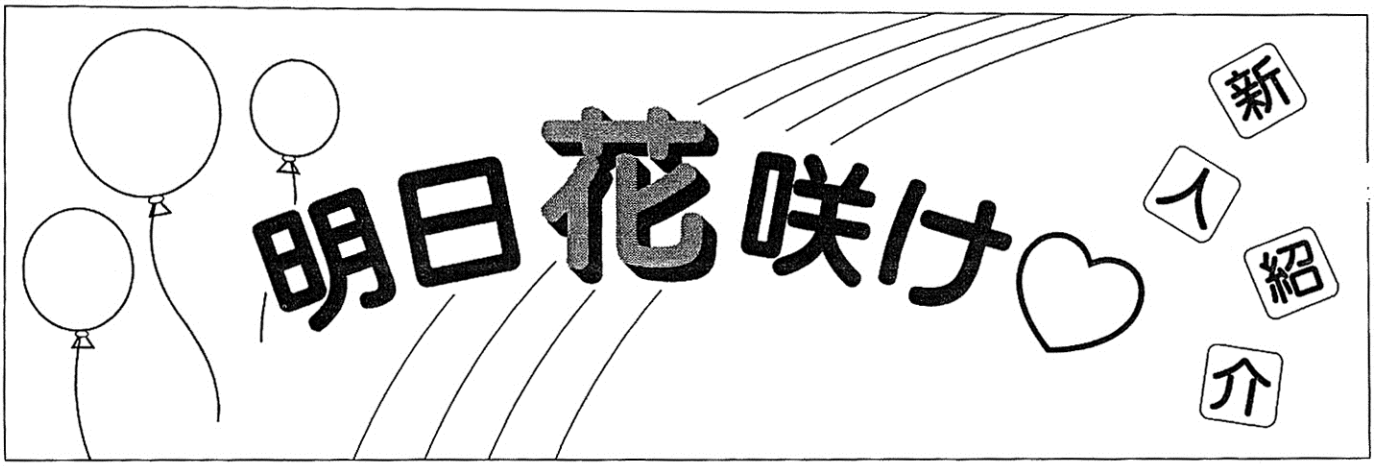
と先延ばし。そういうとき、5歳の亜沙美は、

「お父さん、亜沙美5歳になったらチュッパやめたよね。」

と言われて……

子どものやさしさ、決断力、実行力プライベートでも仕事でも、考えさられる。

大希、亜沙美、君たちの父は、君たちの父として胸を張れるように、こからはがんばらねばと、君たちを見ながら考えている。



津屋崎町社会福祉協議会　森　直人

○経験年数　二年

○趣味・特技　ドライブ、つり

○メッセージ

社会福祉協議会に勤め、「あっ」という間に2年間がすぎ、やっと周りが見えてきたかなという感じです。

社協の仕事には、地域の人達との関わりあいが大切だと思いながら、事務処理の日々を送り、反省しきりです。

しかしこれから介護保険導入など、より一層の専門性が求められてくると思います。

そのためにも、少しでも早く自分の色（特長）が出せるように「頭で考えるよりも即実行」という意気込みを持ち地域へ飛びだしていこうと思います。

がんばります。

三潴町社会福祉協議会　三河　峰子

○経験年数　三年十ヶ月

○特技・趣味　花を観ると幸せになること・サッカー観戦・映画鑑賞

○メッセージ

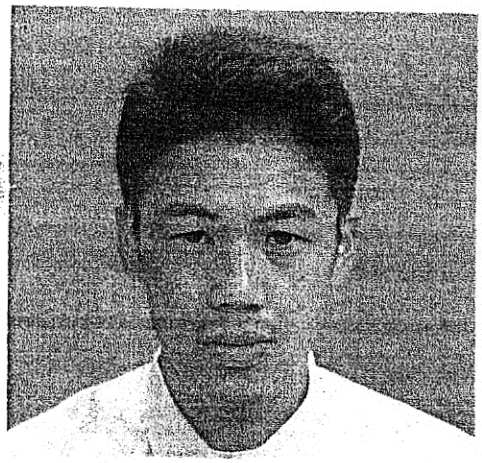
私にとって七ヶ月に及ぶ主事講習会は福祉の何たるかを専門的に学べることと同時に仲間の皆さんのドラマチックな福祉体験を聞くことができ縁日を待つ思いでした。すべてが心にひびく新鮮で強烈な福祉精神への挑戦でした。

三十六名の仲間の皆さんは二十歳から七十六歳まで、職域もさまざまでした。受講するにあたり上司から知識の修得はもちろんのこと、ともに学ぶ仲間づくりの大切さをアドバイスいただきました。回数を重ねるごとに、仲間のみなさんと会話もはずみ仲間意識も自然に生まれてきました。そして、社

会福祉概論・心理学・老人福祉論など二十三教科にわたる学習の中で、少しずつ福祉に対する自分の仕事がみえてきました。ケースワークもコミュニティーオーガニゼーションも福祉の基本は、あたたかいハートそのものです。

今後は学んだことをしっかり受けとめながら、地域のみなさんに親しまれる社協づくり、あたたかい笑顔とハートのハーモニーを大切にしながら努力してまいります。

どうぞ、ご指導よろしくお願いいたします。

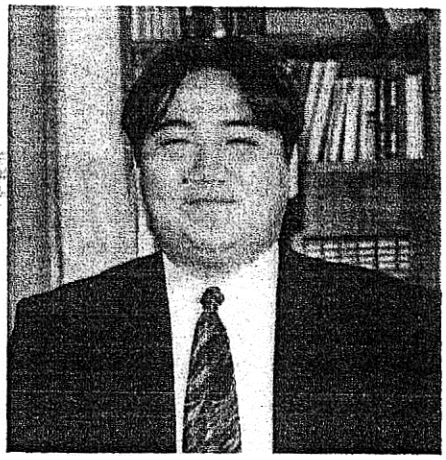


香春町社会福祉協議会
倉光　栄治

○経験年数　三年五ヵ月
○趣味・特技　映画鑑賞、バスケット
○メッセージ

現在、事務補助員として香春町社協に勤務しており、主に共同募金、生活福祉資金、社協一般事務等を担当していますが、楽天的な考えが多く、いつも先輩方に迷惑ばかりかけています。

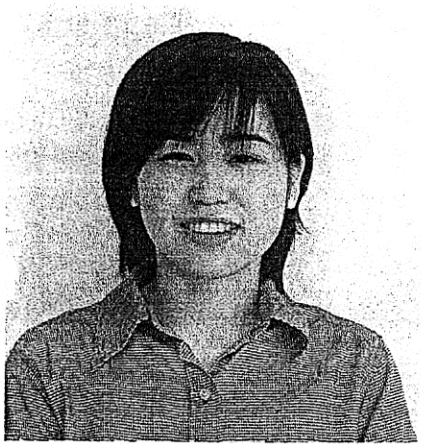
福祉の仕事に就き四年目になりますが、今の自分に与えられた仕事を確実に行い、何にでも積極的に取り組み、何か一つでも地域に役立てるような仕事をやっていきたいと思いますので、皆様方のご指導をよろしくお願い致します。



新宮町社会福祉協議会
髙田　大史

○経験年数　二年二ヶ月
○趣味　キャンプ、読書
○メッセージ

平成7年11月より新宮町社会福祉協議会職員として勤務しはじめて3年目になりました。勤務し始めた頃は大学での勉強と実際の現場とのギャップにどまとってもおりましたがなんとかがんばっています。自分が福祉の道に進もうとしたきっかけは祖父の存在がありました。自分の祖父は重度の寝たきりであり、重度の痴呆でもありました。最初は病院に入院しておりましたが、痴呆がひどくなり、病院ではみきれないということで自宅で介護するようになりましたが介護はほとんど母一人でやっており祖母も入院したことから母は過労で倒れてしまいました。その時自分は何もできませんでした。そのころから福祉に興味をもつようになり、将来は在宅で要介護者をみてある方を援助していくような職業につきたいと思うようになりました。社会福祉協議会も今後介護保険導入などで変化をせまられるでしょうが、最後は住民に喜ばれる福祉というものを忘れてはいけないと思います。自分はまだまだ未熟でありなかなか思うように仕事ができなくて先輩の足を引っぱってばかりですが一生懸命努力していきたいと思います。口べたな自分ですが今後ともよろしくご指導おねがいします。



椎田町社会福祉協議会
植田　陽子

○経験年数　一年十一ヵ月
○メッセージ

平成8年4月より、事務職員として勤務しております。この2年間は、あっという間に過ぎたといった感じで、まだまだ経験不足で、目先のことしか見えませんが、充実した毎日を送っています。学生時代も福祉については、全く勉強しておらず、社協に入るまで具体的にどういった事をするのか、また町では、どういった政策が行われているのかさえ知らない状態でした。事務の面でも、会計を主に担当していますが、共同募金の仕組みや複式簿記など一年目は理解しにくかったことも、やっと包み込めるぐらいになりました。とは言ってもまだまだ勉強することだらけです。

また、社協に入り常に思うことは、福祉というのは「出会い」が多く、人とのふれあいは大切なものだなということです。事務所が社会福祉センターということもあり、毎日たくさんの方が訪れ、福祉関係団体をはじめ、町内にこんなに福祉に係っている方がいるのかと最初は驚きました。

これからも「出会い」を大切にし、「初心忘れるべからず」で頑張っていきたいと思います。